

2015.6.18
vol.40

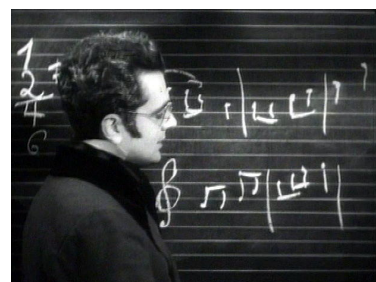
シネマ・ド・リぶらの コラム・ド・シネマ

映画
を
読む

本日の上映作品



未完成交響楽



6月18日(木)

① 10:30 ~ 12:00

② 14:00 ~ 15:30

オーストリアの作曲家、フランツ・シューベルトの青春期と、彼の名曲「交響曲第8番短調《未完成》」の制作秘話を描いたラブ・ロマンス。音楽映画、楽聖映画のはしりとなった作品で、劇中のウィーン少年合唱団を使った演出は後に「野ばら」「サウンド・オブ・ミュージック」で再現されることになる。シューベルトの名曲の数々をバックに繰り広げられるプラトニックな悲恋劇は、美しくも切ない。

貧乏暮らしをしていたシューベルトは、ある日侯爵家の演奏会でピアノを弾くことに。後日、彼が家庭教師をすることになったのは、自分の演奏を笑った令嬢だった。本国ドイツでの評判は必ずしもよくなかったようだが、日本では戦前ドイツ映画の代表傑作と認められ、大ヒットした。

監督・脚本：ヴィリ・フォルスト

原作：ヴァルター・ライシュ

音楽：フランツ・シューベルト

編曲：ヴィリ・シュミット＝ゲントナー

演奏：ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

ウィーン少年合唱団

ウィーン国立オペラ合唱団

ギウラ・ホルファート・ジプシー楽団

出演：ハンス・ヤーライ / マルタ・エッゲルト

ルイーゼ・ウルリッヒ

製作：1933年 ドイツ/オーストリア モノクロ

上映時間：88分



映画を読む

『誓いの休暇』

マルタ・エッゲルトの魅力

今回の上映作品『未完成交響楽 (1933)』は、19世紀初頭のウィーンを舞台に、シューベルトの半生を描いた伝記的映画です。若く貧しいシューベルトと伯爵令嬢の実らなかった恋の顛末と、そのストーリーに巧みに組み込まれた「菩提樹」「野ばら」「セレナーデ」「アヴェ・マリア」など、シューベルトの名曲が人々の琴線に触れ大ヒットしました。現在でもこの作品は、「映像と音楽が融合したトーキー初期の古典的名作」「いわゆる楽聖映画の原点」「ナチス台頭で終焉を迎えたドイツ映画黄金時代の最後の輝き」という、安定した評価と若い熱心なファンを得ています。

私がこの作品に関心を持ったのは、2013年の暮れに上智大学で開催された「ミュージカル映画としての『未完成交響楽』講師：志村哲也氏」というゼミナールの案内ブログです。早速DVDで鑑賞して、伯爵令嬢カロリーネを演じるマルタ・エッゲルト（1912～2013、ハンガリー出身）のポルタメントを効かせた素晴らしい歌唱と激しいチャルダッシュ・ダンスを含む演技、そして癖のある美貌に圧倒され、即熱烈なファンになりました。

この映画の最大の見どころはエッゲルトが歌う次の3つのシーンです。

①シューベルトがカロリーネに初レッスンの指導を始めると、音楽初心者風を装っていたエッゲルトが、突然素晴らしい声で歌い出す。曲はシューベルト最後の年に作曲された歌曲集「白鳥の歌」の第4曲「シューベルトのセレナーデ」。この映画のドイツ語の原題“Leise flehen meine Lieder（僕の歌はあなたへひそかに訴えかける）”は、実はこの曲の歌い出しの歌詞からとられています。

②村の酒場で、百姓姿のカロリーネがシューベルトを悩殺せんと絶唱する。曲は「妾に告げよ」（挿入歌の内、唯一シューベルトの曲ではなく、音楽担当のウィリー・シュミット＝ゲントナーがチゴイネルワイゼンをベースに編曲した主題歌）。このとても官能的な歌の前触れとして、エッゲルトが見せるチャルダッシュ・ダンスも凄いです。この2曲は生録シーンが視聴できます。

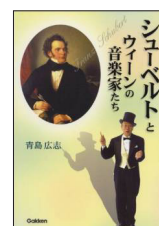
③ラストは田舎道の小さな祠にマリア像を見つけたシューベルトの脳裏に、曲想が湧き出してくるシーン。エッゲルトがウィーン国立オペラ合唱団をバックに安らかに歌う「アヴェ・マリア」がBGMとして流れます。

ちなみに、ユダヤ系ハンガリー人であった彼女は、この後、ナチス独裁のドイツを逃れ米国に亡命するなど、波乱万丈の生涯を送り、2013年暮れに101才で亡くなります。70年を超す長い活躍の跡を、YouTubeの動画で辿ることができます。83才時や90才時のコンサートでの伸びやかなソプラノの歌声はまさに驚異的です。

あと一つ、面白くて気に入っているのが算数の授業のシーンです。教師のシューベルトが、生徒に黒板を使って、算数の九九を教えています。1×1=1、1×2=2、2×2=4…2と4が並んだところで、突然、四分の二拍子記号とト音記号を書いて、音符を並べていきます。先程まで読んでいたゲーテの詩集の「野ばら」の詩にメロディーを付け始めたのです。そして口ずさむシューベルト。いつしか生徒たちも声を合わせて斉唱し始めます。名曲「野ばら」が生まれる瞬間というわけです。この子供たちはウィーン少年合唱団のメンバーです。当然美声なわけです。

この他、天秤・メトロノーム・酒場のランプなど、小物の動きなど遊び心のある演出にも注目してください。 K.M.

『シューベルトとウィーン音楽家たち』	青島 広志	学研	762.3
『すべては音楽から生まれる』 脳とシューベルト	茂木 健一郎	PHP 研究所	760.4
『シューベルトの音符たち』 新シューベルト考	池辺 晋一郎	音楽之友社	762.3
『フランツ・シューベルト』	前田 昭雄	春秋社	762.3
『シューベルトの手紙』 「ドキュメント シューベルトの生涯」より	O・E ドイツチュ編	メタモル出版	762.3
『シューベルト』	村田 千尋	音楽之友社	762.3



『シューベルト生涯と作品』	藤田 晴子	音楽之友社	762.3		
『シューベルトとウィーン』	チャールズ・オズボーン	音楽之友社	762.3		
『楽都ウィーンの光と陰』 比類なきオーケストラのたどった道	岡田 暁生	小学館	764.3		
『ウィーン・フィルハーモニー』 その栄光と激動の日々	野村 三郎	中央公論新社	764.3		
『王たちの民主制』 ウィーン・フィルハーモニー創立 150 年史	クレメンス・ヘルスベルク	文化書房博文社	764.3		
『映画都市ウィーンの光芒』 オーストリア映画全史	瀬川 裕司	青土社	778.2		
『映画の中のベルリン、ウィーン』	飯田 道子	三修社	778.2		
『シューベルトのオペラ』 オペラ作曲家としての生涯と作品	井形 ちづる	水曜社	766.1		
『シューベルト』	エルンスト・ヒルマー	音楽之友社	762.3		
『ウィーン作曲家めぐり』 音楽と歴史の街を行く	長島 喜一郎	アートユニオンクラ シック音楽事業部	762.3		
『ウィーン三昧』 ウィーンを聴く観る歩く	野村 三郎	ショパン	762.3		
『キネマ旬報ベスト・テン 85 回全史』 1924 → 201		キネマ旬報社	778.2		

『誓いの休暇』 感想

- ・最高、最良の映画に魅せられた。プーチンは嫌いだがロシア映画とロシア民謡は大好きだ。今後もロシア映画を上映してもらいたい。
- ・最近、戦争関係の映画 (DVD) をよく観ます。ロシアの映画は初めてです。70 年間、本当に世界はおかしかったんだと再認識させて頂きました。
- ・どこの国でも、母・子・家族は皆同じ。若い二人の、戦時下でのさわやかな交流に心が洗われました。
- ・私だったらよそ見せず一途に帰っただろうに。19 才の若さの優しさだと思った。
- ・昔、学生の時に TV で見ていました。懐かしかったです。今は大きな息子がいて、母親の気持ちが切なく、伝わってきました。
- ・日本もロシアも母親は同じだ。戦争反対ですね。
- ・母親の愛は、いつの時代も国を問わず変わらないことを改めて教えられました。
- ・息子を持つ母親の気持ちに共感しました。
- ・この映画をみて「アベさん、私の息子と孫を戦場に連れていかないで」と思いました。
- ・悲しすぎます。平和を壊す戦争は絶対反対。
- ・このごろの世相は曾ての戦前に通ずるものがある。邦

画・洋画を問わず反戦映画を切に願う。

- ・戦争のない今、とても幸いです。戦争は絶対これからもダメヨネー。感動しました。泣けたヨー。
- ・今、日本のみんなに見てもらいたい。心の中に訴えてくれると思う。
- ・とてもよかった。涙が出るほどです。こんなことにはならないように心しましうー。
- ・何回か見たことがあります。何回観てもいい映画です。モノクロの映画は美しいですね。今度は『我は海の子』が見てみたいです。
- ・『ノートルダムのせむし男』が観たいです。
- ・モノクロの良さがとても良かったです。『生きる』も是非見たいと思います。
- ・昭和 2 年生まれ。終戦間際、岡崎から名古屋へ貨物列車に乗って行ったことを思い出しました。
- ・年配には少し辛い映画でした。
- ・凄く良い映画でした。子供のころを思い出し感動しました。
- ・自分の年齢の時と同じ思いで、なつかしく悲しくなりました。
- ・二度目ですが、戦争がいかにもむごい事か！
- ・初めて参加しました。良かったです。次回も楽しみにしています。

インフォメーション

「シネマ・ド・リぶら」映画上映会 (第41回)

遠い空の向こうに



(C) 1999 Universal Studios. All Rights Reserved.

8月6日(木)

- ① 10:30 ~ 12:00
- ② 14:00 ~ 15:30

託児：500円
(各回5名まで)
申込みは、
1週間前までに。

のちにNASAのロケット・エンジニアになったホームー・ヒッカムの自伝を基に、「ジュマンジ」のジョー・ジョンストン監督がロケットへの夢に賭けた若者たちの挑戦を描いたドラマ。1957年10月、ソ連が人類初の人工衛星スプートニクの打ち上げに成功した。ウエスト・ヴァージニア州の炭坑の町コールウッドで、その美しい軌跡を見ていた青年ホームーは、自らの手でロケットを打ち上げたいと思い、級友3人とともに本格的なロケットづくりにとりかかった。< allcinema >

原題：OCTOBER SKY

監督：ジョー・ジョンストン

脚本：ルイス・コリック、ホームー・ヒッカム・Jr

出演：ジェイク・ギレンホール、クリス・クーパー
ローラ・ダーン

製作：1999年 アメリカ カラー

上映時間：108分

サロン・ド・シネマ

6月・8月・9月の「サロン・ド・シネマ」は、会場のホワイエが大変暑くなるため、開催を中止いたしますのでご了承ください。

午後の部の上映終了後に、2階の活動コーナーにおきましてスタッフの打合せをしています。上映会の運営に関心のある方は、お気軽にご参加下さい。

今後の上映予定 (毎回木曜日)

9月17日 『地下室のメロディー』

10月15日 ★『エデンの東』

12月17日 『群衆』

1月21日 『トップ・ハット』

2月18日 『雨の朝パリに死す』

※ 開催日及び上映作品は、変更になる場合があります。

※ ★はレンタル作品です。

「シネマ・ド・リぶら」の賛助サポーター
受付中！ 年間：1口 2,000円から

随時、ご寄付も
受け付けています。

図書館のDVD資料だけでは、無料で上映できる作品が限られています。あなたの賛助で、上映作品の幅が広がります。登録は市民活動センターへ。相談窓口：戸松 070-5333-1842